

道徳性探究への心理学的アプローチ

—わが国における道徳性に対する考え方を踏まえて—

青山 美樹ⁱ

日本大学大学院総合社会情報研究科

Psychological Approaches in Pursuit of Morality

— Considering Japanese thought on morality —

AOYAMA Miki

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

Psychological research on morality, which originated from the ancient Greek philosophy, is currently spread across a wide range of fields and topics, including cognition, development, society, personality, and education. Morality is an important driving force that leads to human actions in society, allowing for the stable coexistence of humans and cultural development. By pursuing morality from a psychological standpoint, a scientific basis can be established for philosophical and sociological findings, allowing researchers to analyze humans as social animals from a fresh perspective. Previous studies have led to a concept of morality as an entity, and the analyses have resulted in knowledge that could be applied to a wide range of fields. The present study reviews existing results of psychological studies on morality as it aims to reconfirm the significance of psychological approaches in pursuit of morality. While considering morality in Japanese philosophy and the changes over time along with historical changes in psychological discussions, this study provides psychological aspects on morality to apply the existing findings to a wide range of fields.

1.はじめに

道徳性の探究は、古くギリシャ時代に始まり、さまざまな学問領域においてとりあげられてきた。心理学領域においては、ジレンマ研究に代表される、倫理的葛藤場面における判断の基準等を取り扱う道徳心理学や、社会における他者との関係性のなかで人々によって生み出される規範的な枠組み、あるいはその認知過程の変容や発達に関する、認知心理学、認知発達心理学、社会心理学、さらに人格心理学といった領域においても数多くの研究が行われてきた。

道徳性がなぜ人間にとって重要な意味を持つのか。それは、道徳性というものが、社会に生きる人間のとるべき行動を導く一つの重要な動機となり、社会における人間の安定した共存と文化的発展を可能にしているところにある。道徳性を心理学的立場から追究することで、意識的に、あるいは無意識的に、

人間行動に変化をもたらしている道徳性という動機を、実験研究や調査研究から実証科学的にとらえ、社会的動物としての人間をあるべき方向に導くメカニズムとして説明することを可能にする。心理学的研究によって、これまで哲学的、社会学的考察から導かれてきた知見に科学的な根拠を与え、あるいはまったく新たな観点から、社会的動物としての人間のあるべき姿をとらえていくことを可能にしている。

道徳性研究における心理学的アプローチとその貢献については、これまで、沢田・大西・橋口（1968）や唐沢（2013）が道徳心理学研究の動向として、また日本道徳性心理学研究会（1992）が特に教育への応用を意識した目線で丁寧にまとめている。これらの研究からは、道徳性というものが時代とともに、より実体的なものとしてとらえられてきていること、そして、その成果がさまざまな分野で応用可能な知

見となってきていることを知ることができる。

本稿は、先行研究で示されてきた知見を改めてとりあげ、今日に至る道徳性探究における心理学的アプローチの意義を再確認していくことを目的としている。そしてそのなかで、わが国における道徳に対する考え方とその変遷、心理学的考察の歴史的な流れを踏まえ、これまでに得られた知見をさらに幅広く応用につなげていくための手がかりを示していく。

2.道徳科学研究の始まり

人間が古代から追究してきた道徳性は、主として倫理学 (ethics) や道徳哲学 (moral philosophy) において説明されてきた。近代に入り、自然科学とは区別される、道徳科学 (moral sciences) や精神哲学 (mental philosophy) といった経験科学の分野が現れ、同じ頃、心と身体の関係を経験科学的な対応関係で知るといった精神物理学 (psychophysics) の考え方 (サトウ・高砂, 2010, p.21) が生み出された。道徳性においても、客観化可能な指標を用いた新たな心理学的手法 (有光・藤澤, 2015, p.107) によってとらえることが目指されるようになってきたのである。

わが国では、明治維新後に西洋から自然科学の思想が流入するまで、いかに在るべきかという「当為」の問題と、いかに在るのかという「存在」の問題が区別されておらず、日本人にとって自然界の現象は、単なる自然の姿だけではなく、その自然が人間にとってどのような意味をもっているのかを常に問題にしてきた (関, 1964, pp.9-10) と考えられている。

廣池 (1928) は、人間が目指し、最終的に実現し、実行すべき価値を「最高道徳」と位置付け、これを科学的に説明しようとした。廣池が示した「最高道徳」とは、万物の相互扶助と平等的調和によってこの世界が成り立っていることで示されている自然の法則にほかならない。その原理として、自我没却、義務先行、慈悲心、伝統、人心開発、の5つの要素があげ、これらの意義を理解し実行できるような精神が開発され、これらを目的として生きるとき、人間は自然の法則に従っているということが出来る (道徳性心理学研究会, 1992, pp.66-67) と考えた。道徳、すなわち人間のあるべき姿とは、社会の発展と平和の実現を目指す、個人の品性 (という個人に

備わる性質) の向上と、「最高道徳」の実行 (という個人の意志) によって示されると考えたのである。

3.社会と道徳

3.1 社会的欲求と社会秩序の要請

Maslow の「欲求の段階説」では、人間は生涯を通じて自己実現を達成しようとする意欲や傾向を生まれながらにして持ち、その基本的・普遍的な欲求として、社会集団に所属し、社会から受け入れられ、承認されることを追求すると説明されている (日本道徳性心理学研究会, 1992, pp.342-343)。社会という枠組みのなかで他者との共生することが人間に生まれついた性であり、それを維持し永続させようとする意欲を持っている。それゆえ人間に関するあらゆる現象は、この社会のなかで生じているといえる。

和辻哲郎は、他者と生きる人間を存在させる道が秩序であり、すなわち、倫理とは人間が社会的・共同的存在として成り立つうえでの法則である (古川他, 1955, p.247) と述べている。さまざまな人間のさまざまな思いから成る社会が整然と治められ、安定と永続がもたらされているとき、そこには秩序という原理が働いている。道徳はこの原理において、特に個人の内面と深く結びつき、秩序を求める意欲の源泉となっていると考えられている。

3.2 社会的公正と正義

人間は不均衡に対して非常に敏感である。Heider (1946) は認知的均衡理論のなかで、人間が複数の他者との関係において、不均衡状態を認知的に均衡状態に回復させようとする傾向を持っていることを示した。Fehr et al. (2008) も、社会化以前の幼児が利己的な選択肢より公平な選択肢を選ぶことを示し、人間には社会的に公正な世界を目指す性質が生まれながらに備わっていることが示唆された。

今日、公正さ (あるいは衡平さ) とは Equity あるいは Fairness と訳され、平等 (Equality あるいは Sameness) とは区別されている。かつて社会における公正さは、その資源や報酬の公正・衡平な分配に最も重要な問題があると考えられてきたが、その後、衡平さだけが公正さの基準となりうるのかといった議論のなか、より広範な公正判断や、より社会学的

な見地から報酬分配の問題がとらえられてきた。

高山 (1976) は、共同体のなかで必然的に生じる不平等から平等を実現しようとする要請がすなわち倫理であり社会的正義であり、この力動的な倫理的秩序こそが真の社会的調和である (pp.68-69) と述べた。古くプラトンが唱えた正義もポリスの社会的分業の発展のなかで勃発する争いを解決する原理として生じた (古川他, 1955, p.262) と考えられている。

公正 (あるいは社会的正義) は、社会集団において最も基本的かつ重要な道徳的価値であり、人間はこの価値を共有し、目的として働くことで、道徳性という人間特性を発達させてきたと考えられている。

3.3 集団規範と同調

Tomasello (2013) によれば、子どもは生まれながらにして規範に自発的に従おうとする傾向性を持ち (p.38)、社会化によって自己の生きる世界や、その文化が持つ価値観や社会規範を学習し、積極的に従おうとする (p.44) という。さらに青年期になると、社会的視点が加わり、自己は社会規範に基づき他者に評価される対象であり、社会を構成する一員として、他の成員と同様にふるまい、社会に受け入れられたいという動機を持つようになる (p.79) という。

同調は、共同体の成員によってもたらされる社会的圧力に対するある種の適応としてとらえられている。社会的情動を伴い、集団アイデンティティあるいは社会的合理性として説明されるとともに、集団規範の一つの姿として、また共同体の成員の相互理解と尊重に基づく社会的契約としてみることもできる (Piaget, 1935 大友訳, 1957) と考えられている。

4. 規範と倫理

4.1 慣習と道徳

Turiel (1989) は、人間の社会的知識が「道徳」(moral)、「社会的慣習」(social conventional)、「個人」(personal)、の3つの領域から成るとし、子どもは幼少時から道徳と慣習の領域に沿った多くの社会的相互作用を経験する (Nucci & Turiel, 1978) ことで、異なる概念領域を自ら構成していくと主張した。Turiel の領域特殊理論 (domain-specific theory) では、慣習の逸脱経験からは社会的秩序と他者との社会的

関係の維持に関する知識を、道徳の逸脱経験からは正義の概念を構成していくと説明された (日本道徳性心理学研究会, 1992, p.136)。Smetana (1981) や Nucci (1981) の研究からも、子どもが幼少時から道徳と慣習を区別していることが示され、この概念領域の区別が感覚的・直観的なものであると考えられるようになった (日本道徳性心理学研究会, 1992, p.138)。

4.2 規範と懲罰

規範の機能は、その社会に属する人々のさまざまな協力／互惠関係を可能にしている (Tomasello, 2013, p.38)。そのなかで、規範とともに機能しているのが懲罰のシステムである。規範は人々の行動がその社会にとって適切であるか否かを判断する基準であり、それを逸脱する者に対して、罰を与えることでその行為を抑制し、矯正し、結果として社会の秩序は保たれ、集団は維持されると考えられている。

人間はあらゆる文化・社会において、他者がその規範に従っているかどうか常に敏感であり、逸脱者に対しては懲罰的な態度を示す傾向を持っている。Rakoczy, Warneken, & Tomasello (2008) は、子どもが規範に自発的に従おうとするだけでなく、他者に規範を強制しようとすることを明らかにした。

生物学的見地からも、罰は生物の行動を抑制・回避させる刺激であり、その生命活動と安全を維持し、生存を助けていると考えられている。人間の懲罰への動機も社会維持への意欲としてとらえられ、その生起には生物学的な動機すなわち情動といった個体の心的基盤に強く影響されていると考えられている。

4.3 社会的制裁と自己制裁

人間社会における罰には、国家の法制度に基づく刑罰がある一方、共同体毎に異なる慣習や暗黙の了解のなかで、それぞれの成員によって科される社会的制裁といった罰がある。逸脱者に対する蔑視や差別、村八分がこれにあたり、人々はこのような圧力や見せしめによって、共同体の一員としてみなされなくなるような行いを自ら戒めたり、慎んだりする。

人間はまた、他人に規範を強制するだけでなく、罪悪感や恥感情によって自身を罰し、社会的判断を行っている (Tomasello, 2013, p.43)。自己満足感や自

尊心が得られるような向社会的行動を促し、自責の念をもたらすような逸脱行為を慎むように自己制御されている（日本道徳性心理学研究会, 1992, p.226）。

このように、規範に対する逸脱行為は、社会的制裁と、内面化された社会的制裁（自己制裁）という2つの力によって調整され、これらは、社会における自己と、自己内において、いずれも予期的に働き（日本道徳性心理学研究会, 1992, p.226）、究極的には、それぞれの社会集団を維持し、発展させる目的で機能しているメカニズムとしてとらえられている。

5.人間の特質

5.1 集団への志向

人間は集団を志向する動物である。Maslowは、人間の欲求の充足と健全な自己の構築は社会においてのみなされうるとし、自己の内外に在る諸価値の力学的作用から人間性の発達達成される（日本道徳性心理学研究会, 1992, p.348）と述べた。

人間は社会という広範で複雑な仕組みを持つ集団を構築し、機能させ、維持している。そのなかで集団は成員にそれぞれの役割を要求し（役割期待）、成員もその集団に適応するため自らの役割を主体的に担うようになる（役割取得）と考えられている。

Durkheimは、社会が分業することで斉一性を失い個人の異質化が強まると、逆に相互依存が深まり連帯が生まれる（世界大百科事典 第2版）と述べ、人間というものが個人でありながら、より大きな社会の一部として2つの水準で存在している（Haidt, 2016, p.349）と主張した。Haidt（2016）は、Darwinの自然選択や、Durkheimの考え方を踏まえ、人間は集団への志向によって利己性を制御し、種を発展させてきたとし、利己的な遺伝子という個体水準と、種の生き残りへの選択という集団水準の、2つの水準で進化を遂げてきた（p.339）と説明した。

5.2 共感と利他性

人間は本来利己的な動物である。その人間が他者に共感（あるいは同感）し利他性を示すようになったところに道徳性の発展があったと考えられている。Hume（1739）は、人々に情念を共有させる原理を「同感（あるいは共感）sympathy」と呼び、「情念の伝達

Communication of passions」である（相澤, 1982）とした。他者に対する行為がどのような情念を生起させるかを間接的に理解できることが道徳的判断につながっていると考えた。

Hoffman（1979, 1984, 1990）も、他者についての代理的感情反応を「共感 empathy」と呼び、その苦悩が自己に帰属すると認識したとき「罪障感 guilt feeling」が生じるとした。これらは道徳的行動の動機となり、認知機能が特に重要な意味を持っている（道徳性心理学研究会, 1992, pp.320-322）と考えた。

Smith（1759, 1776）は、「同感（あるいは共感）sympathy」をある種の原理として、社会における利己的な自己が、社会規範を内面化し、内なる常識（良心）を持った世界として形成されたのが道徳であると主張した。そして、この原理が他者を判断する能力にとどまらず、相互の社会的結合を可能にし、多様な価値や動機によって結ばれたさまざまな共同体（星野, 1966）を実現させていると説明された。

一方、人間には幼児期から他者の幸福に強い関心を示し、利他性への社会的選好が生得的に備わっている（Fehr & Fischbacher, 2003）と考えられている。社会化とともにその対象はより選好的になり、他者の自分に対する行動に影響を与えるために、他者が持つ自分の印象や公的評判、公的自己を操作するようになる（Tomasello, 2013, p.43）と説明された。

5.3 協力と互惠

Trivers（1971）は、利他性の前提となる互惠性の概念を唱え、人間には互惠的利他性を可能にする精神的なメカニズムがあると説いた。

人間の利他性は生得的なものであり、子どもは早期から人間特有のやり方で他者と協働すると考えられている（Tomasello, 2013, p.86）。Warneken & Tomasello（2006）やWarneken, Hare, Melis, Hanus, & Tomasello（2007）の研究からは、人間の子どもはチンパンジーとは異なり、報酬を得るという具体的なゴールをパートナーと共有しつつも、パートナーと協働すること自体が報酬となり、それをコミュニケーションによって積極的に働きかけることが示された（Tomasello, 2013, pp.57-58）。子どもは個々のゴールに貢献するためだけではなく、協働そのものを行

うために、さまざまな協働行為に参加しようとするのである (Tomasello, 2013, p.86)。人間以外の霊長類に見られるあらゆる協力は、血縁と直接互恵に基づいている (Tomasello, 2013, p.49) が、人間においては、仲間らしさの評価が遺伝的な近さに代わって、他人のために自分を犠牲にする見返りを担保し、赤の他人同士の協力と分業に基づく社会形成を可能にしている (鄭, 2013, p.168) と考えられている。

5.4 ゴールの共有

Tomasello (2013) は、人間の協働を可能にしているのは、共同体のそれぞれの成員が、他者の行動や判断に関心を示し、他者と自己のそれぞれの視点から相互的に行動が調整され、それぞれの役割を果たしながら、共同体としてのゴールを共有し、目指していく構造にある (p.65) と述べている。人間の互恵性や利他性の発達の基盤には、集団への志向という社会的選好があり、共同体のなかで共通のゴールを持ち、協力が必要とされるような相互依存の関係を生み出してきた (pp.41-42) と考えられている。

Woodward (2006) は、人間の乳児が、他者や他の動物たちの行為を、自己の行為と類似した目的や形式をもつもの、あるいは同じゴールに向かうものとしてイメージすることを示した。Tomasello (2013) は、この他者と志向を共有しようとする人間の性を「わたしたち」志向性 ("we" intentionality) と呼び、人間にとって自己をより大きなものの一部として認識することが必要であったと考えた。そして、「志向性の共有とは他者と協力しようとする際に意図やコミットメントを自他間で接続しあう能力のことである」 (Tomasello et al., 2005; Tomasello, 2013, p.4) と述べられているように、人間は共同体に生きる他者との関係性のなかで、信頼関係を築き、協働するための特異的な認知能力を発達させてきたといえる。

5.5 社会的感情

「道徳・倫理の主体は、嫉妬、羨望、怨恨憎悪など、いわゆる社会的な負の感情、あるいは動物的な自己中心的な欲求にまかせてとる反社会的な行動を、抑制することにある」(理化学研究所 脳科学総合研究センター, 2013, p.163) と述べられているように、

個体の性質としてある社会的な負の感情を制御することが、道徳・倫理の本質であると考えられている。

Kagan によれば、人間の幼児は善悪の判断に関する「標準」を持ち、行為から引き起こされる感情や、行為の結果の予測から引き起こされる感情に依拠して善悪を判断している (日本道徳性心理学研究会, 1992, p.215) という。人間は、進化の過程で規範の存在に適応した社会的情動を発達させ、罪悪感や恥感情によって非社会的行動を制御し (Tomasello, 2013, p.43)、逆に、共感によって愛他的行動が引き起こされるように進化してきた (日本道徳性心理学研究会, 1992, p.217) と考えられている。

6.道徳性の発達

6.1 認知の発達

Piaget (1935) や Kohlberg (1976) が唱えた認知的発達理論は、道徳性というものが、認知構造の質的に異なるいくつかの発達段階を経て獲得・構築されていくものであるとする立場に基づいている (日本道徳性心理学研究会, 1992, p.303)。

Piaget の発生的認識論 (genetic epistemology) における認知発達段階説は、子どもが自ら引き起こす概念の認知的葛藤 (シエマ) を、同化と調整を繰り返しながら均衡した状態に導き、うまく使いこなせるようになっていく知的発達の過程を説明したものである (平山・鈴木, 2008, pp.44-45)。道徳的判断においても、行為の結果に基づく他律的な判断から、動機に基づく自律的判断に変わる、変容プロセスとして説明された (日本道徳性心理学研究会, 1992, p.29)。

Kohlberg もまた、道徳性を認知-判断の枠組みのなかでとらえようとした (山岸, 1993)。Kohlberg の道徳性発達段階説 (Kohlberg's stages of moral development) は、道徳的な認知構造のなかでの、矛盾-再組織化から、均衡化への過程を説明している。自己の道徳的思考の枠組みでは矛盾が認識されたとき、それを解消する新しい枠組みを構成することを繰り返すことで、道徳性が発達していくと説明された (日本道徳性心理学研究会, 1992, pp.53-54)。

Piaget や Kohlberg が追究しようとした道徳性は、道徳的な葛藤からその解決を演繹する過程であり、個人が自己の社会的現実を、その社会的環境との相

相互作用を通して構築していくものである（日本道徳性心理学研究会, 1992, p.102）と説明されている。そのなかで Piaget は「認知的不均衡」を道徳性発達における構造変化の主要条件とし、Kohlberg は「役割取得」を道徳的判断の変化の主要条件とした（日本道徳性心理学研究会, 1992, p.117）と考えられている。

6.2 自我の発達

発達心理学研究の発展のなかで、Piaget-Kohlberg の認知発達の見地とは異なるもう一つの大きな流れがあった。それは Freud (1923) に始まる自我発達の見地である。人間には、意識（自我）、前意識（超自我）、無意識（イド）という3つの心的領域からなる精神構造があるとし、あらゆる心的現象は無意識的な動機や欲動から生じているとした。「イド」から生起する無意識の原始的衝動に対し、人格の道徳的体系である「超自我」が制限を課し、「自我」はそれらの均衡を図る力となって作動すると説明された。

Freud の心理学的発達理論（psychosexual development）では、欲求を満たそうとする人間の本能（広義の性欲＝リビドー）と、その欲求に対する満足や不満足の実験が、超自我形成における「同一視 identification」や「エディプス・コンプレックス Oedipus complex」などの固着や反動形成を生み、道徳的性格を含むパーソナリティ（人格）形成に大きな影響を与える（古城, 1999, p.31-32）と説いている。

Erikson の心理社会的発達理論（Erikson's stages of psychosocial development）では、自我の発達は選択的要因と環境との相互作用のなかで生成されていく過程であり、乳児が他者との関係のなかで相互性を持つ範囲を拡大していく過程である（日本道徳性心理学研究会, 1992, p.16）とされた。個人や集団間の対立のなかで、自他を相互に調整する相互性が普遍的なものになっていくことが倫理性である（日本道徳性心理学研究会, 1992, p.25）と説明された。

6.3 社会的相互作用

Piaget-Kohlberg の認知発達理論と Freud- Erikson の自我発達理論は、道徳性・倫理性の発達を、認知と自我という異なる側面からとらえようとしたものであるが、それらの発達の方向性は必然的かつ普遍的

で、いずれも発達というものが他者や社会との相互作用のなかで達成されるものであるとする立場に立っている（日本道徳性心理学研究会, 1992, p.24）。

Mischel は、道徳性が「向社会的行動を発生させる能力（competence）」と、「ある状況で遂行（performance）される動機付け変数」から説明されるとし、個人の状況との相互的な関係や、認知的発達との相互性から道徳性を理解すべきだと主張した（日本道徳性心理学研究会, 1992, pp.241-247）。

Kohlberg 以後の道徳性理論は、社会的相互作用を重視する傾向が強まり（Kurtines & Gerwitz, 1987; 日本道徳性心理学研究会, 1992, p.264）、今日の心理学的考察においても必要不可欠な視点となっている。

6.4 生得性と後天的学習

功利主義的な倫理学では、人間は生得的な社会的感受性を有し、それが道徳性の発達に重要な役割を果たしていると考えられてきた（日本道徳性心理学研究会, 1992, p.361）。Hogan (1970,1973,1975) は、道徳的判断のような非理性的な認知的現象は、より基底な個人の性格構造に基づいている（日本道徳性心理学研究会, 1992, p.364）と考えた。Turiel (1983) の研究からも、幼児が他者に危害を与えることの意味を直観的に理解し、道徳というものを直観的に把握していることが示唆されている（日本道徳性心理学研究会, 1992, p.154）。

一方 Allport は、人間には本質的に反応的な存在と生成的な存在、過去に帰属される面と将来に帰属される面が混在し、それらの葛藤から生成的な存在の優位性が獲得されていくことが道徳性の成熟であるとした（日本道徳性心理学研究会, 1992, pp.338-339）。

Bandura の社会的認知理論では、人間の行動が、生得的な個人要因や後天的な環境要因に一方向的に規定されるのではなく、行動することによって環境要因や認知・感情等の個人要因が影響を受け、それらが行動自体に反映されて、三者が相互に影響し合う全体システムを構成している（日本道徳性心理学研究会, 1992, pp.223-224）と説明された。

今日、Graham et al. (2013) の研究からも、道徳性というものが、生得的な基盤のうえに、多様な文化や社会のなかで後天的学習により形成されていくも

のであることが実証されつつある。

7. 人格と道徳性

7.1 傾向性・志向性

人間の個人差を、人格（あるいは性格）という個人の特徴としてとらえようとしているのが人格心理学の領域である。人格（パーソナリティ）は、個体毎に異なる独自の傾向性であるといえ、その志向に合致するように事態を導き、あるいは阻止するように働く（日本道徳性心理学研究会, 1992, p.338）、個体行動を引き起こす個人的要因と考えられている。

人間にはまた、倫理的基準においても個体毎に異なる感じやすさがあると考えられており、Schmitt, Baumert, Gollwitzer, & Maes (2010) は、公正さに対する感じやすさが個体によって異なることを示した。

Colby, et al. (1987) は、道徳的判断が、「規範」と、その遵守を正当化する「価値」から成るとし、その価値的要素をカテゴリー化して「志向」と呼んだ（日本道徳性心理学研究会, 1992, pp.86-87）。

Kegan によれば、子どもは親からの矯正や罰がなくとも、ある行動の善悪を判断することができ、そのような判断に従って行動しようとする傾向を持っている（日本道徳性心理学研究会, 1992, p.216）という。人間には傾向性あるいは志向性という、個体毎に異なる傾性が生まれながらに備わっており、それによって個人の道徳性の在り様が示され、道徳的判断を完成させていると考えられるようになった。

7.2 特性論

Allport は人格と性格を区別し、性格は価値的要素を含んでいるが、価値を含まない側面が人格（パーソナリティ）であるとした（日本道徳性心理研究会, 1992, p.332）。個人をさまざまな特性の集りとする特性論の立場から、あらゆる個人は固有の個別特性を持ち、一方、多くの人に共有される共通特性があると考え、これらから人間の性格を理解しようとした（サトウ・高砂, 2010, pp.104-105）。

Goldberg (1990) は、神経症傾向 (neuroticism)、外向性 (extraversion)、開放性 (openness to experience)、協調性 (agreeableness)、統制性 (conscientiousness) の5つの特性を、人間に共通する5つの性格特性と

して、その量的比較によって個体差すなわち性格（パーソナリティ）の違いをとらえることができるとする「特性5因子論」を提唱した。人格心理学領域における類型論と特性論という大きな2つの流れのなかで、この Big Five と呼ばれる理論は今日の特性研究の主流となっている。道徳性についても、いくつかの道徳的要素から個人の志向性がとらえられると考えられるようになった (e.g., Graham et al., 2013)。

7.3 美德 (virtue)

人格（パーソナリティ）の枠組みから道徳性をとらえようとする考察において、「美德 virtue」や「品性 moral character」といった道徳的価値、あるいは価値目標に高い価値を置く個人特性が、より高い道徳性を示していると考えられている。

Erikson は、人間の発達の各段階で心理・社会的危機を克服し、発達課題を達成したときに生じる基本的な人格的強さを「Virtue」と呼んだ（日本道徳性心理学研究会, 1992, p.17）。Virtue は価値そのものではなく、価値を活かす力であり、道徳性における Virtue の獲得とは、道徳性を支える力、望ましい生き方を可能にする力の獲得を意味している（日本道徳性心理学研究会, 1992, p.18）。そして、Virtue という価値的・倫理的要素が、他者や社会のなかで育まれる健全な自我の発達に重要な意味を持っていると説明した（日本道徳性心理学研究会, 1992, p.15）。

7.4 品性 (moral character)

「品性 moral character」とは、個人の道徳の質についての評価の目安となる特性としてとらえられ、個体毎に異なるその強さから道徳性の個体差が示されると考えられている。Pervin (1992, 1994) は、Big Five の性格特性理論において5つの要素から人間の個体差が示されているように、あらゆる状況において一人の人間の一貫した態度の傾向として示される特質があるとし、それを「品性」と呼んだ。

Cohen & Morse (2014) は、品性には、性格傾向から説明される動機づけ、自己調整および他者との関係構築能力、道徳性に価値を置くアイデンティティの3つの要素があり、これらの個人特性が、倫理的なふるまい、状況選択、状況づくりなど社会にお

ける個人の行動傾向や、道徳性を要求する組織行動といった行動傾向の個人差を生んでいると主張した。

7.5 良心 (conscience)

沢田ら (1968) は、道徳性を単なる外的規準の内面化ではなく、人格の一部、あるいはその人格の評価された側面とみることができるとし、道徳的判断といった認知の側面、社会的行動としての側面とともに、人間の「良心」といった情緒の側面、「品性」の側面からとらえることができると考えた。

「良心 conscience」はギリシャ語、ラテン語で「意識 consciousness」を意味する。Rousseau (1762) は、「人間の精神の根底には正義と徳との生得的な原理があり、われわれはこの原理に基づき自分の行動と他人の行動の善悪の判断をしている。つまり、われわれは知る前に感じているのであって、良心の現れとは、判断ではなく、感情である。」(中村, 1986) と述べ、良心というものが、意識以前の感情を伴う原理によって示されるものであると主張した。

Freud (1924) は、良心というものがイド (無意識の域) で感知される邪悪への反動形成であるとし、それはリビドー (心的エネルギー) や自己愛から派生しており (日本道徳性心理学研究会, 1992, pp.6-7)、イドが強く抑圧されると良心はより活発に働く (日本道徳性心理学研究会, 1992, p.10) と説明した。

7.6 日本人の美意識

河合 (河合・鶴見, 1997) は、日本人の葛藤場面における判断には、ものごとの全体的な収まり具合を「美意識」としてみる特徴があり、その全体的な「姿」を問題にする、と述べた James Hillman の言葉を取りあげ、善悪の判断においても、個々の行為に基準を適用するのではなく、さまざま関係の収まり具合を問題にし、それが「悪」かどうかではなく、「みっともない」と感じるかどうかを問題とし、結果としてそのバランス感覚が倫理的な判断につながっている (p.288) と述べている。

一方、わが国においては「穢れ」が重要視され、それは「清められる」ことによって消滅すると考えられている (河合・鶴見, 1997, p.287)。梶村 (1988) は、この「清浄」という宗教的価値観を非常に尊い

ことと考える「浄穢」の美的価値観に日本人の特徴をみることができるとし、日本人は「きたない」ことに直ちに罪や悪を意識するように、道徳観の根底に美観を据えている (p.199) と説明している。

8.道徳性探究の拡がり

8.1 文化と道徳

道徳性発達の文化的普遍性は、西欧の合理的価値観に基づいているとする批判から、その後、非西洋文化的価値観や、異なる状況、文脈では論理は異なるとするクロス・カルチュラルな視点 (日本道徳性心理学研究会 1992, p.145) が重視されるようになった。Iwasa (1989) の研究からも、日本人の道徳的判断における、社会や自然とのつながりや、より大きな全体の一部として調和的に生きることを重視する、西洋文化とは異なる価値観が示された。

一方、あらゆる文化・社会に共通する普遍的な倫理的価値観があることも確かである。複雑な社会を生きる現代の人々のなかで、可変的で相対的な価値が生み出されているとともに、普遍的な価値を共有し結ばれている世界があり、これらによって人間の共存共栄が実現されているといえることができる。

8.2 国家と道徳

古く倫理学という言葉が *politike* を意味した (古川他, 1955, p.247) ように、倫理・道徳とは、ポリス (小都市国家) とそれを構成する人々によって共同体に有益なものとして創り出されたものである。人間と国家の間にはある種の内面的な関係があり (高山, 1976, p.124)、そこには共同体を成す共同感情や共同意志がある (pp.145-146) と考えられている。

一方、国家は人間が群れを作り生き延びる最も強力な手段として在る (前田, 2001, p.59)。それぞれの国家はそれぞれの道徳規範を持ち、愛国心や民族のアイデンティティーと同様、ある種の求心力として自らを存続させる力となっている (鄭, 2013, p.104)。

8.3 イデオロギーと道徳

人間は、社会におけるさまざまな判断や行動の基準として、イデオロギーという考え方 (理念) の体系をその正しさの根拠としている (南, 2014, p.87)。

そこには常に「保守」と「革新」という2つの方向性が現れ、対立する一方、これらは人類の発展を実現してきたダイナミクスとしてもとらえられている。

Graham et al. (2013) は、人間の道徳的判断においてみられる個体毎に異なる傾向性から、政治的イデオロギー、すなわち「保守」と「革新」という2つの方向性がとらえられると主張している。

8.4 道徳性の教育

初期の教育心理学における関心は主に子どもの知能や動機づけにあり、知能検査を用いて知能を客観的に把握することで子どもを理解しようとしていた(サトウ・高砂, 2010, p.84)。一方、知能を一側面的にとらえ個人を評価することに大きな批判もあった。

今日、知能の考え方は、生得的か後天的か、遺伝か環境か、といった論争を経て、遺伝子といった生得的な基盤のうえに、さまざまな環境や他者との相互作用からもたらされる後天的な経験が知能を支え、人間を形成していると考えられるようになった。

子どもの道徳性の開発や、善悪の判断の適正化といった道徳性の教育においても、新たな心理学的知見や手法から、教育の成果がより客観的なものとしてとらえられるようになることが目指されている。

9.おわりに

今日に至る道徳性に関する心理学的研究は、認知・発達心理学と教育心理学の領域がその発展を牽引し、さらに社会心理学の領域において道徳性と社会環境、他者との関係性をとらえ、道徳性というものがなぜ、どのように生起し、それがどのような姿で、人間にとってどのような意味を持つのかを追究してきた。

道徳性は、人間の行動を正しい方向に促し、間違った方向に歯止めをかける、一つの重要な動機となり、規範といった枠組みや懲罰にみられる、合理的に集団を維持する戦略として、あるいは人間の欲求や満足感を満たす、精神的支柱として、その存在が示されてきた。道徳性はまた、人間に内面化された傾性としてとらえられるとともに、社会や文化によってその方向性に大きな影響を受けることもわかってきた。特に、わが国においては、自然とともに生きてきた日本人にとって、道徳の観念というものが、

より内的なものとしてとらえられていることも明らかになってきた。長い年月をかけて追究されてきた道徳の姿は、社会に生きる個人が自らの内的な要請に応える側面と、その社会と自らの関係のなかで外的な要請に応える側面から成り立っていると考えることができ、そのなかで、前者は人間という動物においてより普遍的な価値として備わり、後者は人間という多様な文化社会に生きる動物がより柔軟に、かつ安定的に存続するための価値として必要とされてきたものであるということが出来る。これらは、道徳というものが普遍的であると同時に、それぞれの社会によって異なる相対的な側面を持つと考える、これまでの哲学的議論を裏付けている。

道徳性という人間だけに備わる特質が、人間を他の動物とは異なる種として分けている。このような性質は、人間が非常に大きな社会集団で生きることを選択し、合理的かつ安定的にその集団を維持しつつ、個体の生存を永続させていこうとする一つの生命戦略としてみる事が出来る。利己的に活動するそれぞれの個体が巨大な社会集団のなかで共生しようとするとき、そこには何らかの規範的な要素が必要となり、それを共生する他者にも強制し、逸脱者には罰を与え、それが集団を維持する力として働いている。また、他者と協力して、目標を成し遂げ、さらなる進化をはかっていこうとする、人間にはそのような志向が生まれつき備わり、そのような志向を持つような生物学的進化を遂げてきたと考えられている。そのなかで特に重要なこととしてあげられているのは、共同体の成員が目標を共有し、同じ方向に向かって協働することを可能にする「志向の共有」である。このような認知的能力こそが人間の文化的発展を実現してきたと考えられるようになった。

一方、今日においてもなお、道徳というものの概念は明確にはとらえきれておらず、またそれを裏付ける根拠も不十分であると言わざるをえない。近年、道徳心理学領域において、道徳性というものがいくつかの要素から説明されるものであるとする考え方が提案され活発に議論がなされている。道徳性を複数の要素からより実体的に説明できるようになることで、個体を評価する一つの目安として用いることができると考えられる一方、かつて知能テストと

いうものが個人のステレオタイプの見方を助長し、行きすぎたレッテル貼りや不要な差別を生んだ歴史があったように、道徳性を測る尺度が個人の全てをとらえるものではないことを十分に理解し、間違った解釈がなされないようにすることが重要である。

近年、学校教育で目指されている「道徳性を会得する」とはどのようなことか。それはすなわち「社会集団のなかで他者とともに生きる人間のあるべき姿」を見出すことに他ならない。他者とともに生き、共存・共栄をはかるうえで、自らは何をすべきなのか、何をなせばよいのか、それを意識的・無意識的に導き出せるようになることである。他者との良好な関係性を築くうえで、自らのそのふるまい、その考え方、その対応は、良い結果を生み出せるのか。いま眼前に起きていること、在ることだけでなく、時空を超え、人間という過去から未来に続く系統のなかで、まだ一度も出会ったことも話したこともない人々に思いを致し、同じ集団に属する一人として、すべきこと、してはいけないことを理解し、内面化し、自らに期待された役割を果たしていくことが道徳の本質であり、それを習得することが共同体に生きる全ての人間には求められている。

人間はたった一人で生きていくことはできない。たとえ生きたとしても、その種と系統の存続は不可能で、その個人が持つあらゆる価値もただ失せるだけとなる。自己の成長のみならず、他者との協働や協力もなく、ただひたすら利己的な生命体として人生を終えるような生き方は、生物の本来の目的とは異なっている。人間は社会的動物として、社会で生きるように生まれついた生き物であり、そのなかで道徳は、社会に生きる全ての人間に必要な不可欠な、基盤であり、方策であり、ルールなのである。

道徳性の重要性は、それが人間を人間たらしめている特質にあり、人類の存続と繁栄につながっているところにある。道徳に関する心理学的アプローチの知見は、教育現場のみならず、さまざまな社会の場において応用されていくことが期待されている。今後のさらなる心理学的研究の進展によって、道徳の概念がより明確にとらえられ、人々の行動や考え方を予測することを可能にするとともに、人間にとって道徳という価値の重要性がより深く理解されるよ

うになっていくと考えられる。日本人が無意識のうちに内面化している、西洋人とは異なる道徳性についても、より明らかになっていくであろう。そして次なるステージとして、道徳性の個体差を知り、ひいてはその個体の集合体としての社会の姿を予測していくことにつながっていくのではないかと考える。

しかし、それだけではまだ人間の全てを説明することはできない。道徳性というものがいくつもの時代を経ていまなお追究されているように、人間はおそらくこれからも、道徳の普遍的な価値と、人間であることの意味を、多元的なアプローチによって探究し続けていくのではないかと考えるのである。

引用文献

- 相澤照明 (1982). 共感の生起と射程について： デイヴィッド・ヒューム美学構成への一視点 美学, 33(1), 53-63.
- 有光興記・藤澤文 (2015). モラルの心理学—理論・研究・道徳教育の実践— 北大路書房
- Cohen, T. R. and Morse, L. (2014). Moral character: What it is and what it does. *Research in Organizational Behavior*, 34, 43-61.
- Colby, A., Kohlberg, L., Speicher, B., Hewer, A., Candee, D., Gibbs, J. and Power, C. F. (1987). *The measurement of moral judgment. Vol. 2; Standard issue scoring manual*. New York: Cambridge University Press.
- Fehr, E., & Fischbacher, U. (2003). The nature of human altruism. *Nature* 425: 785-791.
- Fehr, E., Bernhard, H., & Rockenbach, B. (2008). Egalitarianism in young children. *Nature*, 454, 1079-1083.
- Freud, S. (1923). *Das Ich und das Es*. Vienna: Internationaler Psychoanalytischer Verlag, W. W. Norton & Company. (フロイド, S. 井村恒郎 (訳) (1970). フロイド選集 4 自我論 日本教文社)
- Freud, S. (1924). *Der Untergang des Ödipuskomplexes*, *Internationale Zeitschrift für Psychoanalyse*, Band 10, Heft 3 (pp. 245-252). Vienna: Internationaler Psychoanalytischer Verlag. (フロイド, S. 高橋義孝 (訳) (1976). フロイド選集 14 愛情の心

- 理学 日本教文社)
- 古川哲史・勝部真長・佐藤俊夫・波多野述磨・村田宏雄 (編) (1955). 倫理学名著百選 現代道德講座 第七巻 河出書房
- Goldberg, L. R. (1990). An alternative "description of personality": The Big-Five factor structure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 59, 1216-1229.
- Graham, J., Haidt, J., Koleva, S., Motyl, M., Iyer, R., Wojcik, S. P., & Ditto, P. (2013). Moral foundations theory: The pragmatic validity of moral pluralism. *Advances in Experimental Social Psychology*, 47, 55-130.
- Haidt, J. (2012). *The righteous mind: Why good people are divided by politics and religion*. New York: Pantheon. (ハイト, J. 高橋洋 (訳) (2016). 社会はなぜ左と右にわかれるのか 紀伊國屋書店)
- Heider, F. (1946). Attitudes and cognitive organization. *The Journal of Psychology*, 21, 107-112.
- 平山 論・鈴木隆男 (編) (2008). 発達心理学の基礎と臨床 第1巻 ライフサイクルからみた発達の基礎 ミネルヴァ書房
- 廣池千九郎 (1928). 道德科学の論文 廣池学園出版部
- Hoffman, M. L. (1979). Development of moral thought, feeling, and behavior. *American Psychologist*, 34(10), 958-966.
- Hoffman, M. L. (1984). Empathy, its limitations, and its role in a comprehensive moral theory. In Gewirtz, J., & Kurtines, W. (Eds.) *Morality, moral development, and moral behavior* (pp. 283-302). New York: Wiley.
- Hoffman, M. L. (1990). Empathy and justice. *Motivation and Emotion*, 14(2), 151-172.
- Hogan, R. (1970). A dimension of moral judgement. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 35, 205-212.
- Hogan, R. (1973). Moral conduct and moral character: A psychological perspective. *Psychological Bulletin*, 79, 217-232.
- Hogan, R. (1975). The structure of moral character and the explanation of moral action. *Journal of Youth and Adolescence*, 4(1), 1-15.
- 星野彰男 (1966). アダム・スミスの道德と経済(二) 一橋論叢, 55(6), 861-867.
- Hume, D. (1739). *A treatise of human nature*. Oxford: Clarendon Press. (ヒューム, D. 大槻春彦 (訳) (1951). 人性論 (3) 第2篇 情緒に就いて 岩波書店)
- Iwasa, N. (1989). *Situational considerations in moral judgment: A Japan-United States comparison*. Unpublished doctoral dissertation, Harvard University.
- 梶村 昇 (1988). 日本人の信仰 民族のく三つ子の魂 > 中央公論社
- 唐沢 穰 (2013). 社会心理学における道德判断研究の現状 社会と倫理, 28, 85-99.
- 加藤周一 (編) (2005). 世界大百科事典 アルマナック 第2版 平凡社
- 河合隼雄・鶴見俊輔 (編) (1997). 倫理と道德 岩波書店
- Kohlberg, L. (1976). Moral stages and moralization: The cognitive-developmental approach. In T. Lickona (ed.), *Moral development and behavior: Theory, research and social issues*. Holt, NY: Rinehart and Winston.
- 古城和子 (編) (1999). 生活に活かす心理学—体験と自己発見 中田康行 フロイトの性発達理論 (pp.31-32) ナカニシヤ出版
- Kurtines, W. M., & Gerwitz, J. L. (Eds.) (1987). *Moral development through social interaction*. New York: Wiley.
- 前田英樹 (2001). 倫理という力 講談社
- Mischel, W. (1973). Toward a cognitive social learning reconceptualization of personality. *Psychological Review*, 80, 252-283.
- 南 直哉 (2014). 善の根拠 講談社
- 中村博雄 (1986). カント道德論に対するルソーの影響 哲学, 36, 152-162.
- 日本道德性心理学研究会 (編) (1992). 道德性心理学—道德教育のための心理学— 北大路書房
- Nucci, L. P. (1981). Conceptions of personal issues: A domain distinct from moral and societal concepts. *Child Development*, 52, 114-121.
- Nucci, L. P., & Turiel, E. (1978). Social interactions and the development of social concepts in preschool

- children. *Child Development*, 49, 400-407.
- Pervin, L. (1992). *A personality: Theory and research* (Chapter 28: Epilogue: Constancy and change in personality theory and research. pp. 689-704). John Wiley & Sons Inc.
- Pervin, L. (1994). *A critical analysis of current trait theory* (Psychological Inquiry 5, pp. 103-113). New Jersey: Rutgers University.
- Piaget, J. (1935). *The moral judgment of the child*, New York: Free Press. (ピアジェ, J. 大友 茂 (訳) (1957). 臨床児童心理学Ⅲ 児童道徳判断の発達. 同文書院)
- Rakoczy, H., Warneken, F., & Tomasello, M. (2008). The sources of normativity: Young children's awareness of the normative structure of games. *Developmental Psychology*, 44(3), 875-881.
- 理化学研究所 脳科学総合研究センター (編) (2013). 脳科学の教科書(こころ編) 岩波書店
- Rousseau, J. J. (1762). *Émile, ou De l'éducation*. Paris : Garnier. (ルソー, J. 今野一雄 (訳) (1963). エミール(上)(中)(下) 岩波書店)
- サトウタツヤ・高砂美樹 (2010). 流れを読む心理学史—世界と日本の心理学 有斐閣
- 沢田慶輔・大西文行・橋口英俊 (1968). 道徳性の心理学的研究の動向 教育心理学年報 7(0), 77-98.
- Schmitt, M., Baumert, A., Gollwitzer, M., & Maes, J. (2010). The justice sensitivity inventory: Factorial validity, location in the personality facet space, demographic pattern, and normative data. *Social Justice Research*, 23, 211-238.
- 関 計夫 (1964). 道徳心理学の理念—場の道徳哲学への試み— 學藝書房
- Smetana, J. G. (1981). Preschool children's conception of moral and social rules. *Child Development*, 52, 1333-1336.
- Smith, A. (1759). *The theory of moral sentiments*. Strand & Edinburgh: A. Millar; A. Kincaid & J. Bell. (スミス, A. 米林富男 (訳) (1969). 道徳情操論 未来社)
- Smith, A. (1776). *An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations*. London: W. Strahan T. Cadell. (スミス, A. 大河内一男 (訳) (1978). 国富論 中公文庫)
- 高山岩男 (1976). 道徳とは何か 創文社
- 鄭 雄一 (2013). 東大理系教授が考える 道徳のメカニズム KK ベストセラーズ
- Tomasello, M., Carpenter, M., Call, J., Behne, T., & Moll, H. (2005). Understanding and sharing intentions: The origins of cultural cognition. *Behavioral and Brain Sciences*, 28(5), 675-691.
- Tomasello, M., Dweck, C., Silk, J., Skyrms, B., Spelke, E. S., & Chasman, D. (2009). *Why we cooperate*. Boston Review Books, The MIT Press. (トマセロ, M. 橋彌和秀 (訳) (2013). ヒトはなぜ協力するのか 勁草書房)
- Trivers, R. L. (1971). The evolution of reciprocal altruism. *Quarterly Review of Biology*, 46, 35-57.
- Turiel, E. (1983). *The development of social knowledge, morality and convention*. New York: Cambridge University Press.
- Turiel, E. (1989). Domain specific social judgments and domain ambiguities. *Merrill Palmer Quarterly*, 35, 89-114.
- Warneken, F., & Tomasello, M. (2006). Altruistic helping in human infants and young chimpanzees. *Science*, 311 (5765), 1301-1303.
- Warneken F., Hare, B., Melis, A. P., Hanus, D., & Tomasello, M. (2007). Spontaneous altruism by chimpanzees and young children. *PLOS Biology*, 5(7), E184.
- Woodward, A. L. (2006). The infant origins of intentional understanding. *Advances in Child Development and Behavior*, 33, 229-262.
- 山岸明子 (1993). コールバーグの道徳性発達理論—発達心理学の立場から (ミニシンポジウム・法社会のフロンティア II) 法社会学, 45, 121-125.

(Received: January 21,2019)

(Issued in internet Edition:February 6,2020)

ⁱ 本論文を作成するにあたり熱心にご指導賜りました田中堅一郎教授に心より感謝申し上げます。